郷土史話(一)

新奇隊田村穀の墓

――西南の役史料の発見――

佐伯　羽柴　弘

茶の間で見るテレビドラマ「獅子の時代」によって、明治戊辰の役を学び、また西南の役についてのかえり見の機会が与えられている。歴史は繰返すというが、そんな内戦は二度と繰返してはならない。しかし、歴史は繰返して思うべきものである。まだ進行中であるが、西南の役について佐伯の新しい話題が持ち上っているので、その概要を会員にお伝えして見たい。

去る八月の末のある日、佐伯市役所の住民課の紹介で、延岡の夕刊デイリー新聞の田口・飯干両記者の訪問をうけた。それは延岡市西方二五キロほどの北方町荒平(あらびら)の甲斐憲一氏が、自宅の近くで西南の役関係の陣没者、「佐伯村士族田村養作」と刻まれた墓石を発見した。その拓本や聴書きを示され、この田村という兵士は佐伯のどこの方で、今遺族筋に当る家はどなたであろうかというのである。

ご持参の写真を見ると、それは佐伯招魂所(陸軍墓地)の墓標によく似た、高さ七〇センチばかり、幅一五センチほどの角柱型で、拓本を見るとその正面に

秋月院寛誉放念是穀居士

とあり、両側面には

明治十年七月三十一日　戦死

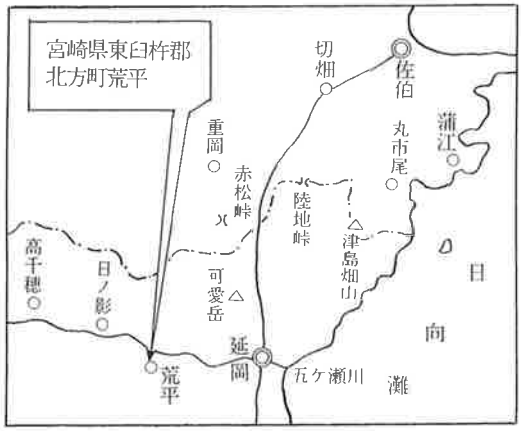
大分県南海部郡佐伯村

士族　田　村　養　作

と読める。夕刊デイリーの記者両氏は田村養作に該当する人物を探しあぐね、そこで私のところに見えられたのであった。

西南の役についての郷土文献としては、幸い柴田南華編『明治丁丑豊後西南戦記』にくわしく書かれ、その要約されたものが『佐伯市史』に出ている。

明治十年六月、薩軍は四百余人をもって佐伯城下に侵入、残留士族や町家を養賢寺に集め、薩軍の小隊長福田抱一・内藤無一らが、こもごも立って西郷挙兵の真意をのべ、士族は従軍するよう、商人は軍資金を提供するよう勧誘し、半ば脅迫した。



これに応じた士族（元佐伯藩士）は総数四十余人、出発直後途中から女装してのがれ帰ったもの数人を除く四十人が、薩軍新奇隊に属して豊日国境地帯の山岳戦から、五ケ瀬川流域や延岡近郊の戦闘に参加している。その結果薩軍が和田越えの決戦に破れ、可愛岳突破直前の全軍解隊によって、海岸伝いにのがれ帰ったもの二十一人、官軍に降服したもの八人、残りの十一人が不幸国内戦の犠牲者であった。

（「佐伯市史」三〇九ページに全姓名あり）

その戦没者十一人の中に、田村穀（たなつ）の名前がある。そこで私は田村養作は穀（たなつ）の俗称か別名であろうし、戒名の中にも「是穀（ぜこく）居士」として穀の文字を入れておること、外に田村姓の全くないことから、新奇隊に従軍戦死した田村穀の墓に万間違いあるまいことを伝えた。

なお、墓標の七月三十一日には、五ケ瀬川の両岸で激しい攻防戦が行なわれているそうである。また南海部郡の文字から郡制実施の明治十一年以後、佐伯村とあるから明治二十一年町村制実施の以前に、この墓標は建てられたことになる。当時はまだ賊名をもって呼ばれていたので、世間をはばかりながら誰かの手によって、ひっそりと墓は営まれたことになる。

実はこの日、北方町荒平からの知らせで佐伯市教委の

加藤文化係長（本会会員）は、車をとばして現地を訪れていたことを後にきいているが、加藤氏の知らせも見解もまだ伺っていない。

またその翌々日、宇目町の軸丸勇氏（会員）が延岡から私に電話をかけて来た。昼食に店に立寄ったら、夕刊デイリー紙に私の写真もはいった、「眠っていた薩軍戦死者の墓」の記事を見た。今から現地に行こうと思うから……との連絡であった。そこで私はあらましの話を伝え、こちらでも調査中である旨と、甲斐家の篤志に呉々も謝意を表していただきたいとお願いした。その結果は数日後写真と墓標の拓本と、「西南戦争延岡隊戦記」（河野弘善著）を届けて下さった。また市役所住民課の方もわざわざお越し下さって今後の打合せをした。その一つは慶応四年の「家中分限帳」にある「徒士田村丈左衛門」（住所新町）が田村穀の家ではないかとしての追求をお願いし、私は戒名に「寛誉」とあるから浄土宗と考え、潮谷寺の過去帳をお尋ねすることを約した。

その翌日私は潮谷寺の黒木方丈さんに、まず電話であらましの話を伝え、過去帳について調べていただくことをお願いした。めったに外出しない私も、元気を出して潮谷寺を訪れた。

早速その過去帳を金庫の中から出して見せて下さったが、それには正しく「秋月院寛誉放念是穀居士」とあり、「田村蔵治長男穀」と読みがなまでもついている。そうすると家は下鉄砲町の徒士田村丈左衛門方でなくて、下中島の「元佐伯藩足軽田村蔵治」方である。

そこで、さらにいろいろ調べたところ、その田村家は明治の終りごろ、大阪の方に転居したとのことであるが、幸いにも家系の一部が次のようにわかった。

田村蔵治
- （長男）穀
- （次男）勇六 ―― 安政三年生

これで見ると、次男勇六が当時二十一才位であるから、その兄穀の西南の役従軍は二十五、六才と思われる。

私は二三の方に申しあげた。田村の戦没を伝え聞いた遺族は、墓を建てずにお骨をひろうて、佐伯に連れて帰り、市内どこかの墓地に改めて手厚く葬ったであろうと。しかし、潮谷寺の過去帳に歴然と立派な戒名が残っているからには、二、三年後あるいは数年後、田村家が戒名

をもらい、延岡まで出向いて墓石を刻み、荒平の甲斐家にでも頼んで僧侶をまねき、手厚く葬ったことであろう。そして毎年でなくとも時折りは墓参もしていたであろうが、明治の末年田村家が大阪に転住した以後は、ついぞ誰一人訪ねる者もなく、やっと今回甲斐憲一氏の手によって、草むらの中から掘り出され、歴史の陽の目を受けることになったといえる。有難いことである。

先年の門司の木辻一族の佐伯招魂所の展墓、これはほとんど百年を経てのこと、官軍の戦没者ですらかくの如しである。打続く山岳戦は焦熱の六、七月、しかも薩軍は敗戦後退の連続であった。死体の収容・埋葬などとうてい叶わなかったのが実情、もう百年もたった今日、なお陣没の月日も場所も不明で、風雪の中に朽ち果てたまま、報われることのない兵士が外にもまだあるであろう。

今となっては、私共には打つ手は少ない。しかし西南の役は決して忘れてしまってはならない。明治維新以来この西南の役に至る国内の兵乱は、わが国が近代国家に生まれ変るための陣痛であり、しかもそれは同胞が殺し合う民族の悲劇であった。繰返してはならない。二度とあってはならない。そのためにも甲斐氏による「田中穀の墓」の発見は、きわめて意義深い。

・郷土の出版紹介

羽出浦の歴史と民俗

―安部弥右衛門翁の好著について―

風もなくさざ波たたぬ海の面を
　さやかに照らす　秋の夜の月

その幼少の日から、朝夕ながめつづけてこられた、羽出の浦に対する翁のこの感懐は、ここに生きつづけている庶民の生活に対する愛情と、九十四歳という生活体験による、人生の悟りの姿ではあるまいか。

『大分県地方史』に、七回にわたって連載されたこの民俗記録も、こうして一冊にまとめられると、今更のように、翁のたくましい執念に圧倒される。まったく頭が下がるばかりである。

幸い翁のご厚意で、限られた印刷部数の中から、貴重な一冊を史談会はいただいている。会員のお求めに応じ次々とご一読ねがうことにしている。

（羽柴）